

「がんを身近に考える」巡回図書展示の成果と課題

発表者

須賀千絵¹⁾、池谷のぞみ²⁾、岡本裕樹³⁾、八巻知香子⁴⁾、張心言⁵⁾、山下ユミ⁶⁾

¹⁾実践女子大学、²⁾慶應義塾大学、³⁾⁴⁾国立がん研究センターがん対策研究所、⁵⁾慶應義塾大学院・国立がん研究センターがん対策研究所、⁶⁾京都府立図書館・慶應義塾大学大学院

国立がん研究センターがん対策研究所では、市民が入手しうるがん情報の質的な充実を目的に、公共図書館と連携した取り組みを続けてきた。巡回図書展示は、この取り組みの一環として行われ、がんに関する図書の展示キットを作成し、全国の公共図書館に貸し出すという事業であった。展示キットは、「がんを身近に考える」というテーマでの展示を想定し、展示用に選んだ本、ブックリスト、POP、がんに関する説明パネル、ブックスタンドなどの展示用機材をひとまとめにしたものである。テーマの設定、本の選択、ブックリストの作成は、患者図書室と公共図書館の職員や図書館情報学の研究者が健康医療情報のおすすめ本を紹介し合う Web 協働選書プロジェクトが担当した。2019 年の北海道浦河町での先行実施を経て、2020 年から本格的に始まった巡回図書展示は、延べ 108 館を巡回し、2023 年 3 月に終了した。本研究では、当展示キットを利用した図書館へのアンケート等から、この取り組みの成果と課題を考察する。

アンケートは、展示を実施した 108 館中 84 館から回答を得た（回収率 77.8%）。選書については 98%、ブックリスト・POP・説明パネルについては約 90%が肯定的に評価するなど、展示キットに対する満足度は、全体として高かった。特に回答者の 93%が、選書の良かった点として「新しい本を知るきっかけになった」ことを挙げており、公共図書館で提供する健康医療情報の充実につながったと思われる。

自由記述の回答では、熱心に見ている利用者の存在や年代を超えての利用があったなどの報告があり、手ごたえを感じている様子も伺えた。また一般市民だけでなく、医療関係者の利用についての報告もあった。展示キットは、展示の完成品ではなく、それぞれの図書館の事情に合わせて活用できるパーツとして企画したため、各館の展示の規模や内容も多様なものであった。展示キットに含まれた資料やパネルだけでなく、既存の蔵書やパンフレットと組み合わせた館も見られた。完成品の展示ではないというメッセージが十分に伝わらなかった館からは、自館には使用しにくいパーツがあるという不満があった。また展示の自由度が高い反面、さまざまな種類のパーツの管理が難しいという課題もあった。

巡回展示を通して、県立レベルから町村立レベルまで、全国のさまざまな規模の図書館に、健康医療情報の提供に取り組む役割があるというメッセージを伝えることができた。新しいサービスを普及するために、一般に、啓発のための資料の刊行や研修の実施といった方法がしばしば用いられる。しかしこれらの方法は、一方的な知識や情報の伝達に留まることも多く、実際のサービスの改善にすぐにつながらない場合もある。巡回展示は、実際のサービスの実施を促す点が大きな特徴であり、図書館員は、自館の利用者の反応を直接確認することもできる。今後、公共図書館における健康医療情報サービスの充実に向け、両者の手法をどのように組み合わせしていくか、さらなる工夫が求められる。